

氏名	つだあきまさ 津田明雅
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第352号
学位授与の日付	平成18年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	Catuhstava とナーガールジュナ ——諸著作の真偽性

論文調査委員 (主査) 教授 御牧克己 教授 赤松明彦 教授 徳永宗雄

論文内容の要旨

第1章：論文の目的と方法。本論文はナーガールジュナという人物の輪郭を明らかにすることを目的とし、諸作品の真偽問題やそれらの著作順の解明を中心にして論じている。なかでも特に Catuhstava（以下、CS と略す）に関して詳しく分析し、次いでこれまで十分に検討されることのなかった諸讃歌をも吟味している。さらにその他の諸著作についても、先行研究をまとめることを中心にして、真偽性を判定している。こうして真作と思われるものを選び抜き、それらを内容の違いによって分類し、最終的には著作順に並べることを試みている。

第2章：ナーガールジュナの人物像。彼にはいくつかの伝承が存在するが、中国側の伝承とチベット側の伝承との間には共通点が少なく、その生涯については謎が多い。生存年代は150—250年頃というのが最も妥当であろう。

第3章ではナーガールジュナに帰せられる諸著作の真偽性が判定されている。まず第1節ではCSが検討されている。「研究史」では、CSの4つの讃歌が何であるのかが明らかになっていく過程が、先行研究を辿ることによって概観されている。そして残された問題として、次の3点の未解決な問題が検討される：(1)CSの成立過程、(2)CSのサンスクリットとチベット訳の違い、(3)CSのうちの一つである Acintyastava（以下、As）の第45偈は唯識派の三性説と何らかの関連が伺えるがそれはどう説明されるべきか。第1点に関しては、他文献での引用の際の記述などから、ナーガールジュナの諸讃歌がプラジュニャーカラマティ（Prajñākaramati）の時代あたり一つにまとめられたと思われるが、チベットにはCSが存在していた形跡がない。したがって、もともと独立して存在した4つの讃歌が、プラジュニャーカラマティの時代（10世紀後半から11世紀初め）あたりにインド（あるいはごく限定された地域）で一つにまとめられCSと呼ばれたが、それはチベットには伝わらず、4つが別々に単独の讃歌として伝わった、という可能性が考えられる。第2点に関しては、両テキストの違いが表にして示されている。最後の点に関しては後のAsの項で検討される。

「テキストおよび注釈書」はCSのサンスクリット写本の情報を整理する。4つの讃歌の揃ったものとしては7本、Lokātīstava（以下、Ls）単独の写本として5本、そしてCSとしてまとめたものかどうか不明なものとして1本がある。これらのうち東大写本に関してはさらに奥書きの情報などの分析により、注釈者はシローマニ（Śīromaṇi）、筆写者はルーパラージャ（Rūparāja）であることが明らかになり、年代としてSamvat 暦612年（西暦1492年）と693年（西暦1573年）がえられている。そしてこの東大写本および他のもう一本の写本を利用して、CSテキストの再校訂を試み、得ることができた新たな読みあるいは解釈が挙げられている。最終的にテキストを訂正したのはLs 8, Niraupamyastava（以下、Ns）11, 22, As 7, 14, 28, 34の計7偈、またテキストの訂正はないが正しい解釈が明らかになったのは、Ls 14, 15の計2偈である。そして4つの讃歌それぞれについて真偽性が検討されている。検討の結果、いずれも真作と認められる。ただしNsとAsに関しては完全に解決したとはいえ、検討の余地も残した。Nsでは「法界」などの記述が如来藏思想などとの何らかの関わりがあるのではないかという疑いがあり、Asでは唯識思想と関わりのある用語がでてくる。本論文ではこれらのうち、特に問題のある「法無我」という語と「依他起」という語について詳しく検討されているが、これらはナーガ

ールジュナの思想と必ずしも矛盾するわけではなく、ナーガールジュナ晩年から唯識思想の萌芽期にかけてのものではないかと考えられている。

第3章の第2節は「ナーガールジュナと讃歌」についてまとめている。ナーガールジュナの時代には大乘仏教運動が隆盛を極めており、そうした状況下でブツダを誉め歌う仏教讃歌が作成され、それらが日常的な仏塔への礼拝に用いられていた。そうした状況にあつて、ナーガールジュナもいくつかの讃歌を残している。大乘運動初期には仏塔を巡る思想の変化があつたといわれ、理論上は仏舎利ではなく大乘経典を崇拝するようになる。しかし実際は崇拝の場所や形式は従来のものを引き継いで、仏塔で日常的に讃歌が唱えられていたとみられる。ナーガールジュナは世俗の人々に向けて仏塔崇拝を勧めているが、その背後には経典崇拝という意図をもちつつも、実情に合わせて仏塔崇拝を勧めているという意味で、決して矛盾しているとはいえない。

「ナーガールジュナに帰せられる讃歌」では、チベット大蔵経北京版（以下、P）の讃頌部に収められたものを中心に検討されている。重複する作品などを確認した上で、それぞれの真偽性を、「諸讃歌の真偽性」の項で検討する。それらは P nos. 2010, 2013, 2015, 2017, 2018, 2020—2028, 2639, 2644—2646, 4604, 4878, 4881, 5429, 5471である。これらのうち比較的高い確率で真作と思われるものは Stutyatīstava（以下、Ss）であり、偽作の疑いは残るが十分な根拠がないためにひとまず真作と認められるものが Niruttarastava（Niruttarastotra）（以下、Nrs）、また偽作だと断定はできないが哲学的記述がなく必ずしも真作とはいえないものとして、nos. 2023—2027が挙げられる。そして残りのものは偽作と考えられる。

第3章の第3節では「その他の諸著作」として、これまでに真作とされてきた作品を中心に、先行研究の蓄積のあるもので比較的著名な14作品に関して真偽性が検討されている。それらは、MK, Śūnyatāsaptati（以下、ŚS）、Vigrahavyāvartanī（以下、VV）、Vaidalyaprakaraṇa（以下、VP）、*Vyavahārasiddhi（以下、VS）、Yuktiṣaṣṭikā（以下、YŚ）、Ratnāvalī（以下、RĀ）、Suhṛllekha（以下、SL）、『菩提資糧論』（以下、BS）、Pratītyasamutpādhārdya（以下、PH）、Mahāyānaviṃśikā（以下、MVim）、Bodhicittavivarāṇa（以下、BV）、Sūtrasamuccaya（以下、SS）、『十二門論』（以下、DŚ）である。これら以外にも漢訳でのみ残されている『大智度論』、『十住毘婆沙論』、『方便心論』にも触れられているが、特に真偽性は判断されていない。結論として、BV, SS, DŚ以外は真作と判断される。

第4章の「まとめ」では、以上みてきた諸作品が「真作と考えられるもの」、「ひとまず真作と考えてよいもの」、「偽作と考えられるもの」に分類して示されている。真作と考えられるものは MK, ŚS, YŚ, RĀ, PH, BS, Ls, Paramāthastava（以下、Ps）、Ss、ひとまず真作と考えてよいものは VV, VP, VS, SL, MVim, As, Ns, Nrs、および P nos. 2023—2027の5讃歌であり、これら以外は偽作と考えられる。さらに、これら真作の可能性のあるものを内容の違いで分類すると、「空の思想を中心に説く哲学的なもの」、「空の思想が説かれるが論理的傾向の強いもの」、「大乘の実践を説く道徳的倫理的なもの」、「哲学的記述がなく、ブツダの特質、地名、出来事、神話的要素などの名称への言及にとどまるもの」に分けられる。哲学的なものは MK, YŚ, PH, MVim, Ls, As, Ns, Ps, Ss, Nrs、論理的傾向の強いものは ŚS, VV, VP, VS、実践的倫理的なものは RĀ, BS, SLであり、残りの5讃歌が、ブツダの特質などの名称への言及にとどまるものである。最後の5讃歌は真作とはしたもののナーガールジュナ以前の可能性もある。また、哲学的とした YŚ には、宗教的倫理的な側面を強調し、大乘の実践を説いていこうとする傾向がうかがえるため、実践的著作の先駆けともいえるかもしれない。最後の5作品を除いた前3分類に含まれる諸作品が、さらに年代順に並べられている。その際、ナーガールジュナの生涯における著作活動時期を三期に分け、初期に MK, ŚS, VV, VS、中期に VP, PH, YŚ, BS、後期に RĀ, SL, MVim, CS, Ss, Nrs が配当されている。こうした諸著作成立の時間的關係は最後に図表として示されている。

論文審査の結果の要旨

『般若経』の空の思想を哲学化して中観学派を創始したナーガールジュナ（150-250年頃）は、インド仏教思想史上最大の思想家の一人として名高く、彼自身『中論』を始めとして多くの論書を残しているが、一方で彼の名声を利用して彼の名前を借りて著作された作品もかなりの数に登っている。さらに、従来真作と考えられてきた『廻諍論』や『ヴァイダリア

論』のような論書を偽作ではないかと疑う研究者も出現している程である。彼の名前で伝わる論書の真作と偽作の判定がナーガールジュナ研究の一つの重要な視点となっている。

本論文は、ナーガールジュナに帰せられる『四讃』と呼ばれる讃仏文学のテキストを確立し、その内容を吟味することによって真作か偽作かの判定を行い、次いでその他の彼の論書についても出来る限り真作か偽作かの判定を試みたものである。全体は四章からなり、第一章に於いて本論文の目的を述べ、第二章に於いてナーガールジュナの伝記を紹介した後、第三章に於いて『四讃』を始めとして数多くのテキストを取り上げて逐一吟味している。第三章第一節は『四讃』自体を取り上げ、研究史を踏まえた内容分析の後、サンスクリットとチベット語の校訂本と和訳注、語句索引、『四讃』の注(Akāṛīṭikā)のテキストと和訳注を提示している。第三章第二節はナーガールジュナに帰されるその他の多くの讃歌の吟味に当てられ、夫々の讃歌のチベット語校訂本と和訳注が提示されている。19の讃歌が吟味されているが、真作1、準真作1、不明5、他は偽作と判定されている。第三章第三節は従来ナーガールジュナの著作としてよく知られている14の論書が吟味され、『菩提心釈』、『経集論』、『十二門論』の三作が偽作として判定され、残りの論書は真作と判定されている。第四章は以上の論考を総括し、以上に吟味された諸論書が、真作、ひとまず真作と考えてよいもの、偽作、に分類されて示され、その内真作の可能性のあるものがさらに哲学的なもの、論理的傾向の強いもの、実践的倫理的なもの、ブッダの特質などの名称への言及にとどまるもの、に分けられている。また、ナーガールジュナの著作活動時期を三期に分け夫々の論書を配している。かくして本論文はA4版ワープロ原稿500頁に近い労作となっている。

本論文が明らかにした新しい知見は数多いが、特筆すべき功績として以下の五点を挙げる事が出来る。

まず第一は、上にも述べた如く、ナーガールジュナに帰される可能な限り多くのテキストを吟味して真偽の判定をし、真作については内容的時代的发展について全体の見通しをつけたことである。

第二には、本論文の中心主題である『四讃』のテキストの批判的校訂本と和訳注を提示し、索引まで完成したことである。このテキストは今後研究者に最も信頼出来るテキストとして大いに利用されることであろう。『四讃』とは、『不可思議讃』『無比喩讃』『超世間讃』『勝義讃』という、仏陀に対する四つの讃歌の集合に対して与えられた呼称である。これらの讃歌は漢訳された形跡はなく、サンスクリットとチベット語訳でのみ伝存されている。『四讃』という呼称が用いられるのはインドの後期(10世紀後半から11世紀初め)になってはじめてのことであり、チベットでは四つの讃歌夫々は伝わってはいるが『四讃』として伝わっていた痕跡は確認できない。

第三には、二の文献学的な仕事を基礎として、『四讃』をナーガールジュナの真作と判定してよいということを実証したことである。『四讃』の内特に『不可思議讃』には後代の唯識思想の三性説(遍計所執性、依他起性、円成実性)の用語と思われるものに似たものが用いられているためにナーガールジュナの真作であることを疑われることが多かったが、論者は、遍計所執性、依他起性に似た用語は用いられているものの円成実性という用語は用いられていないため、必ずしも三性説の文脈で解する必要はなく、またナーガールジュナの他の真作と考えられる著作の内容とも整合するので真作と判断してよいことを示したのである。

第四には、『四讃』の注釈である Akāṛīṭikā という注釈を初めて使用に耐えうる形で示したことである。同注釈の写本は1982年にデンマークの研究者 Cristian Lindtner が写真版を公開したのではあるが、それ以来、Cristian Lindtner はもとより誰もその研究に着手する者も無く今日に至ったものである。著者はコロフォンによればシローマニ、著作年代は15世紀と比較的新しく、思想内容の注は少なく、ほとんどが語義解釈の注であるが、従来意味不明であった『四讃』のいくつかの偈頌を解釈するのに役立っている。

第五には、『四讃』以外の多くの讃歌の校訂本、和訳注を完成したことも、その大部分は真作ではないとはいえ、大きな功績であるということが出来る。

以上のように優れた本論文にも要望すべき点や不備がない訳ではない。本論文は中観学派のナーガールジュナに絞って考察が為されているが、密教のナーガールジュナにも一言あって然るべきではなかったかと思われる。第四章の末尾に掲げられた表と分類は有益であるが、あまりにきれいすぎるきらいがある。『空七十論』や『廻諍論』は論理的傾向が強い論書とばかりは言えず、哲学的傾向も勿論具えている。また、本論文中には誤読、誤訳、誤記、誤植等も少なくなく、せつかくの好論を汚している部分がある。しかしながら、これだけの大部なものであってみればやむをえないと思える部分もあり、ま

た、それらは少しの努力で容易に改善出来るものであり、本論文の価値を著しく損なうものではもとよりない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2006年1月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。